

#### 4. Tl-201 心筋イメージング法による AC バイパス術後のグラフト開存に関する評価

矢野 仁雄 酒井 雅司 久保 博  
野村 秀樹 斉藤 義昭 海老根東雄  
矢吹 壮 町井 潔 (東邦大・三内)

AC bypass 術を施行した64例(狭心症29例, 心筋梗塞35例)を対象に, 負荷心筋イメージング法(Ex-Tl-IM)でグラフトの開存性を検討した. 術前の Ex-Tl-IM で reversible defect を呈した領域への 74 grafts では術後に心筋灌流量が増大した 67 grafts 中 64 grafts (96%) が開存し, 増大しなかった 7 grafts 中 6 grafts (86%) が閉塞し有意差 ( $p < 0.001$ ) を認めた. 術前に fixed defect であった 20 grafts に関しては 3 grafts の領域のみ術後に心筋灌流量は増大し, 2 grafts (67%) の開存は確認されたが変化しない17 grafts の領域は評価できなかった. また術前 no defect であった 61 grafts に関しても, 術後 new defect が生じた 1 graft の領域は閉塞していたが, 変化しない 60 grafts は評価できなかった. Ex-Tl-IM は AC bypass 術の graft 開存を評価するにあたり, 術前に reversible defect を認める領域に対しきわめて有用であったが, fixed defect や no defect 領域の graft 開存を予測するには限界がみられた.

#### 5. コンピューターに接続した $\gamma$ -カメラによる下肢リンパ流に対する毛細血管内静水圧の影響

中村 良一 廣田 彰男 新井 功  
境 敏秀 矢吹 壮 町井 潔  
(東邦大・三内)

対象は健康人12例(男女比 7: 6,  $26.2 \pm 8.9$  歳), 各種疾患患者 14 例(男女比 4: 10,  $51.6 \pm 13.1$  歳)であった. 方法は臥位にて  $^{99m}\text{Tc-HSA}$  0.1 m/ 3 mCi を前脛骨部皮下に注入, 大腿部にて40分間記録し, 時間放射能曲線をリンパ流として得た. 末梢静脈圧 PVP を足背静脈にて測定し, 10分ごとに (1) 下肢下垂18例(健康人6, 患者12), (2) カフによる加圧9例(健康人6, 患者3)を行った.

結果: PVP 上昇によりリンパ流充進をきたした者は 59.3% (16/27) で, 健康人 41.7% (5/12), 患者 73.3% (11/15) であった. さらに充進例 16 例中 PVP  $< 30$  mm H<sub>2</sub>O でリンパ流充進したものは 0,  $30 \leq \text{PVP} < 40$  で 3,

$40 \leq \text{PVP} \leq 50$  で 10,  $50 \leq \text{PVP} < 60$  で 2,  $60 \leq \text{PVP}$  で 1 例であった.

結語: 下肢では末梢静脈圧がほぼ 35~60 mm H<sub>2</sub>O に達するとリンパ流が活発化する傾向にある.

#### 6. I-123 IMP SPECT により crossed cerebellar diaschisis を疑われた症例

百瀬 敏光 小坂 昇 西川 潤一  
町田喜久雄 土屋 一洋 町田 徹  
大嶽 達 飯尾 正宏 (東大・放)

3 例の脳梗塞患者に対して I-123 IMP SPECT を施行し, crossed cerebellar diaschisis を呈した症例を経験したので報告する.

第1例は49歳男性, 右片麻痺があり, IMP で左前頭葉から頭頂葉, 病巣と対側の小脳半球で perfusion の低下をみた. 血管造影で左中大脳動脈起始部の閉塞がみられ, X-CT では左基底核の低吸収域を認めるのみであった. 第2例は78歳男性, 左片麻痺と左半側空間失調を認め, IMP で右前頭葉から頭頂葉, さらに対側小脳半球への perfusion の低下を認めた. X-CT では cerebral atrophy のみであった. 第3例は63歳男性で右上肢知覚障害と右片麻痺を呈し, IMP で左大脳半球の広範な領域および対側小脳半球に perfusion の低下を認めた. X-CT では左前頭葉深部から頭頂葉にかけて低吸収域を認めた. crossed cerebellar diaschisis は 1981年, Baron らが  $^{15}\text{O}_2$  を用いた PET による報告を行ったが, I-123 IMP SPECT によって簡便に診断できると考えられた.

#### 7. $^{123}\text{I}$ -IMP 所見と XCT 所見とに相違のみられた脳疾患症例

石井 勝己 山田 伸明 中沢 圭治  
高松 俊道 菊一 哲夫 鈴木 順一  
依田 一重 松林 隆 (北里大・放)  
坂井 文彦 (同・内)

局所脳血流を反映していると言われている N-isopropyl-P [ $^{123}\text{I}$ ]-Iodoamphetamine (IMP) による SPECT 所見と X 線 CT 所見との間に相違のみられた脳血管障害例について報告する.

[症例 1] 70歳, 女性, 2 年前に脳出血あるも軽快, 本

年 3 月に痙攣発作出現, XCT では異常はみられず, IMP にて 2 年前の出血巣に一致して血流障害をみとめ病巣局在部をとらえた. [症例 2] 38 歳, 女性, 左中大脳動脈塞栓症, 発症後 8 時間目の XCT では明らかな異常所見はなかったが IMP で左皮質, 皮質下の血流障害と crossed cerebellar disachisis をみとめた. [症例 3] 46 歳, 男性, 右中大脳動脈閉塞症, 術前術後の XCT 所見に変化はないが, 術後の IMP で血流改善をみとめた.

#### 8. 脳血管性病変に対する $^{123}\text{I}$ -IMP の使用経験

鈴木 豊 (東海大・放)  
斉藤 斉 山本 正博 (同・神内)

脳梗塞 8 例, 脳内出血 3 例, モヤモヤ病 1 例, その他 1 例の計 13 症例に  $^{123}\text{I}$ -IMP による脳の SPECT を施行し, その結果と X 線 CT の結果とを比較した. 脳梗塞 4 例, 脳内出血 1 例, モヤモヤ病の計 6 例で, X 線 CT で検出された病巣より大きな異常部位が SPECT により検出された. 脳梗塞では, 発作後早期に検査した小さな梗塞例であり, モヤモヤ病, 脳内出血では, X 線 CT で検出された病巣とまったく別の部位に, 新たな異常が検出された. X 線 CT で検出された病変の範囲と SPECT で検出された異常範囲が一致した 4 例の梗塞は, いずれも大きな梗塞症例であった.

$^{123}\text{I}$ -IMP を用いた SPECT により梗塞発作の早期ないし発作以前より病変の局在部位の検出ないし予見できること可能性が示唆された.

#### 10. 多発性嚢胞腎の画像診断

額川 晋 池田 滋 石橋 晃  
(北里大・泌)

1972 年より 1983 年までの過去 11 年間に当科を受診し, 多発性嚢胞腎との診断を受けた者 156 名を対象とし, 画像診断中心に検討し以下の結果を得た.

1) 腎シンチグラム, CT スキャン, 超音波断層撮影は, いずれも嚢胞腎診断には優れた非侵襲性の検査法であり, このうち後 2 者は特に有用と思われた.

2) 腎シンチグラムでは, 血清クレアチニン値 5 mg/dl 以下, クレアチンクリアランス値 30 L/day 以上において有効な診断ができるものと思われる.

3) 肝嚢胞合併を 67.0% (73/109) の高頻度に, 脾,

脾嚢胞をおのおの 6.0% (4/67) に, 脳動脈瘤合併を 36.4% (8/22) に見ることができた.

#### 11. 陰嚢部 RI アンギオグラフィーの有用性

塩山 靖和 神納 敏夫 高島 澄夫  
古川 隆 井上 英夫 三上 浩史  
深草 駿一 (日赤医療セ・放)  
小島 弘敬 (同・泌)

睾丸捻転は速やかな外科的処置を必要とする疾患であるが, 急性副睾丸炎との鑑別が難しい. 陰嚢水腫も時として, 睾丸腫瘍と誤診されることがある. 精索静脈瘤は男性不妊の原因の一つとされ, その検出は臨床的に重要である. これらの疾患について, 陰嚢部シンチの有用性を検討した.

睾丸捻転, 急性副睾丸炎, 精索静脈瘤, 陰嚢水腫, 睾丸腫瘍等の 24 例に,  $^{99\text{m}}\text{Tc-O}_4^-$  10~20 mCi を静注し, 連続撮像および 5~20 分後の静態像撮像を行った.

睾丸捻転では, 睾丸部に一致し円形の cold area が認められ, hot に描画される急性副睾丸炎とは明確に鑑別でき, 治療方針の決定にきわめて有用であった. 睾丸腫瘍の多くでは, 腫瘍部への RI の取り込みが, hot に認められ, 陰嚢水腫との鑑別が可能であった. 精索静脈瘤では, 触知できないものでも RI 集積を静脈相より認めること, 立位で集積の明瞭となることより, 存在診断が可能であった.

#### 12. ゴーシェ病のシンチグラム所見

岡田 淳一 山田佳代子 早川 和重  
荒木 力 林 三進 内山 暁  
(山梨医大・放)  
横山 巖 赤松 功也 (同・整)

ゴーシェ病 (Gaucher's disease) は先天性脂質代謝異常症の一種であるが, シンチグラムに関する報告は少ない. 今回 1 例を経験し, そのシンチグラム所見を報告した.

症例: 19 歳, 男性. 2 歳時脾腫のため脾摘出術をうけゴーシェ病の診断を得た. 以後大腿骨などに骨壊死や骨折を繰り返していたが, 右膝関節痛が出現し当院受診となった.  $^{99\text{m}}\text{Tc-phytate}$  によるコロイドシンチグラムでは肝腫大および肺へのびまん性集積と左膝関節周囲骨へ